

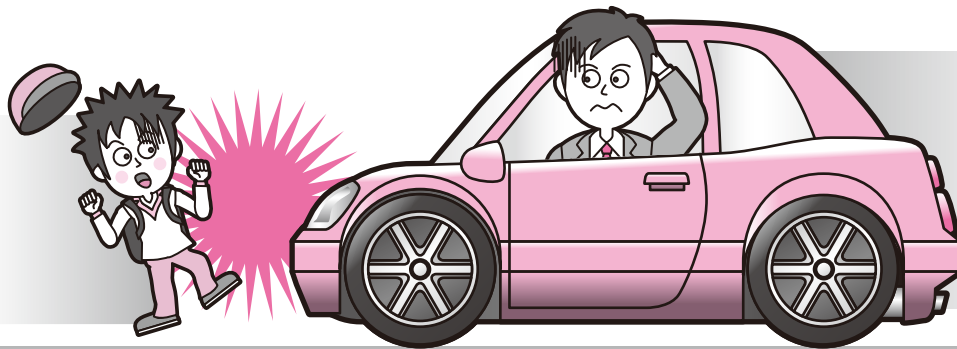
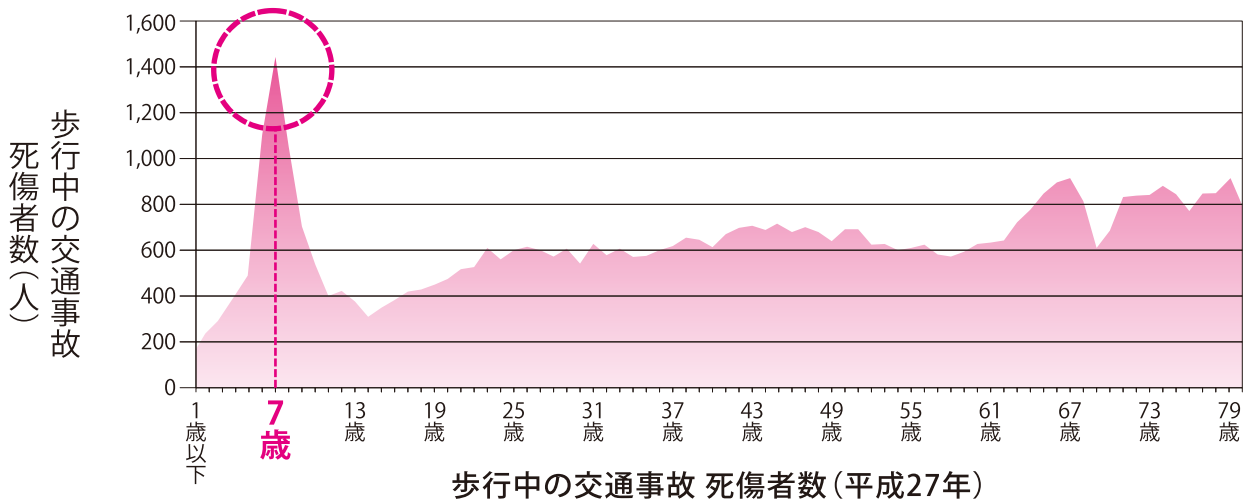
ITARDA INFORMATION

交通事故分析レポート

No.116

特集 子供の歩行中の事故

～小学校入学時に歩行中の事故が急増、入学までに十分な安全指導を～



- ① はじめに.....P2
- ② 年齢別の歩行中の交通事故 死傷者数について.....P3
- ③ 子供の歩行中の交通事故の特徴について.....P4
- ④ まとめ.....P8

① はじめに

平成27年に発生した歩行中の交通事故による死者数は1,534人、これに負傷者を加えた死傷者数は56,962人でした。図1のグラフは年齢別の死者数と死傷者数の構成率を示したのですが、死者数の70%、死傷者数の32%を65歳以上の高齢者が占めていますので、高齢者に対する安全対策の重要性は広く知られているところです。一方、19歳以下をみると、死者数は3%と比較的小さな割合ですが、死傷者数では18%を占め、死者数の割合の6倍になります。表1は5歳刻みの死者数と死傷者数を一覧表にしたのですが、死傷者数が最も多い年齢層は高齢者ではなく5歳～9歳で4,853人にも上ります。

そして年齢をさらに細かくして1歳刻みで死傷者数を見てみると、もっとはっきりとした特徴が現れます。それは成人の死傷者数が600人前後、65歳以上では一段と多くなって800人前後で推移しているのに対して、“7歳児の死傷者数は約1,400人と際立って多い”という点です(表紙図参照)。

そこで今回のイタルダインフォーメーションでは、子供の歩行中の交通事故に焦点を当て、他の年齢層と比較してどのような特徴があるか、そしてなぜ7歳児にピークが生じているのかを見ていきたいと思います。

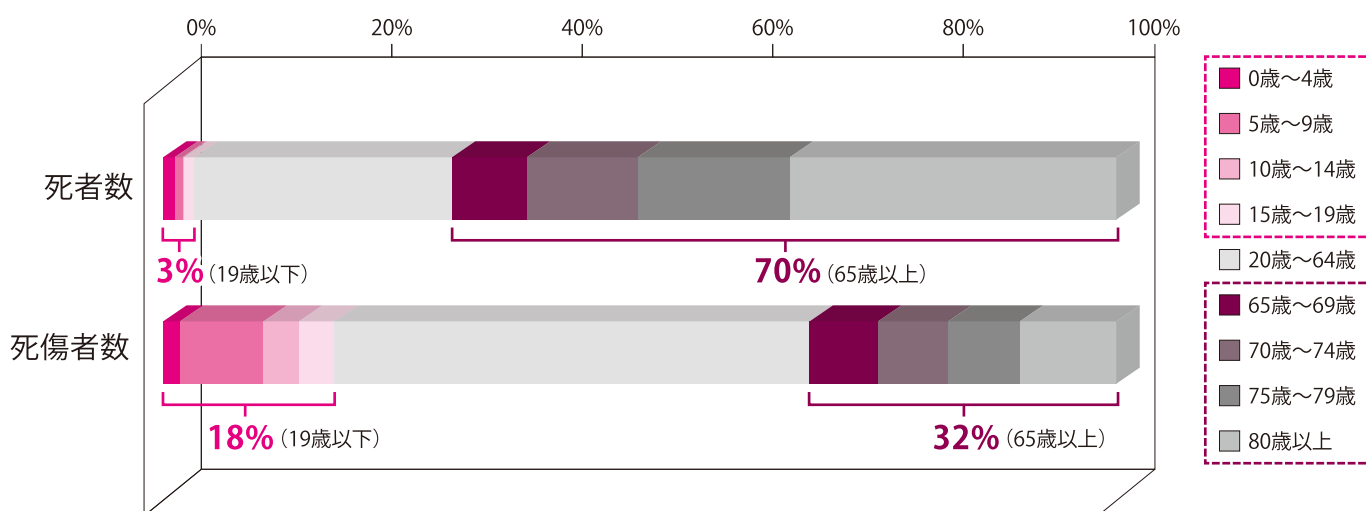


図1 歩行中の交通事故死者数および死傷者数 年齢別構成率 (平成27年)

表1 歩行中の交通事故死者数および死傷者数 (平成27年)

	0歳～4歳	5歳～9歳	10歳～14歳	15歳～19歳	20歳～24歳	25歳～29歳	30歳～34歳	35歳～39歳	40歳～44歳
死者数(人)	19	13	3	16	25	28	33	27	41
死傷者数(人)	1,132	4,853	2,155	2,027	2,729	3,009	2,961	3,115	3,440

	45歳～49歳	50歳～54歳	55歳～59歳	60歳～64歳	65歳～69歳	70歳～74歳	75歳～79歳	80歳～84歳	85歳以上
死者数(人)	51	58	60	90	121	179	244	287	239
死傷者数(人)	3,468	3,263	3,010	3,443	4,137	4,149	4,290	3,412	2,369

② 年齢別の歩行中の交通事故 死傷者数について

図2は平成23年から平成27年の歩行中の交通事故の死傷者数を年齢別のグラフにしたものです。図1の5歳刻みの構成率では分かりませんでしたが、死傷者数を1歳刻みにするとすべての年で7歳に大きなピークが表れていることが分かります。この7歳児のピークは毎年減少してはいるものの、ある年の特別な傾向ではないことが分かります。過去5年間で最も少なかった平成27年の数字でみると、7歳児の死傷者数は1,462人を数え、20歳～60歳付近までの死傷者数は約600人前後、65歳以上では約800人前後で推移していますので、7歳児の死傷者数は成人の2.5倍、65歳以上の高齢者の約2倍の多さとなっています。

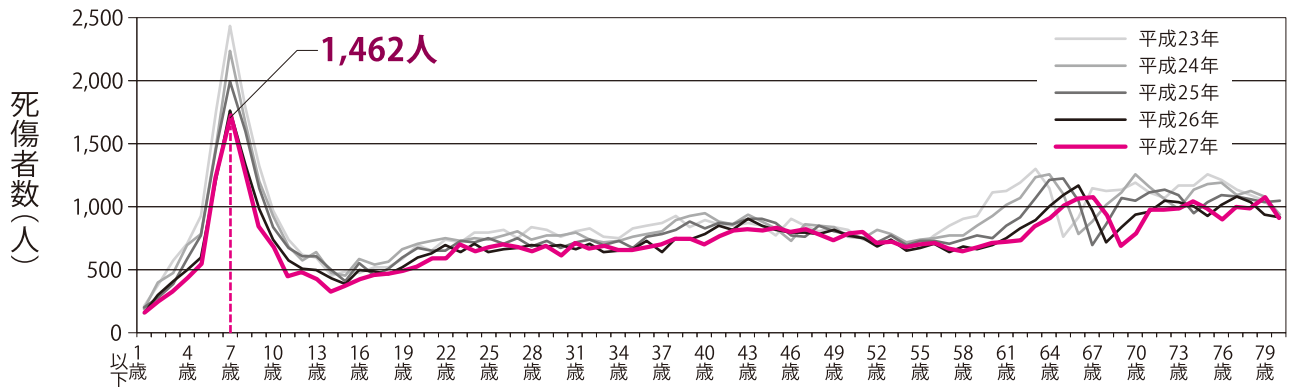


図2 歩行中の交通事故 死傷者数 (平成23年～平成27年)

次に、日本の総人口の年齢構成の影響を考慮したいと思います。図3は総務省統計局が公表している平成26年の年齢構成です。このデータを用いて総人口10万人当たりの死傷者数を計算したものが図4のグラフです。総人口の年齢構成を考慮しても7歳児のピークははっきりと表れ、7歳児の総人口10万人当たりの死傷者数は140人で、全年齢で算出した値46人の約3倍にもなります。7歳付近の総人口は他の年齢層よりも少ないため、7歳児の死傷者数は総人口の年齢構成とは別の要因で増加していることが分かります。

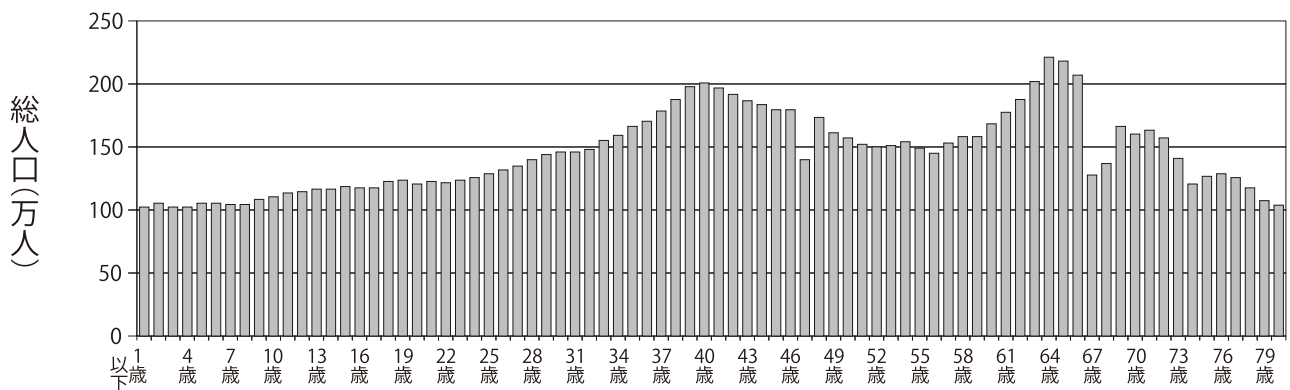


図3 【参考】日本の総人口 年齢構成 (平成26年) 出典：総務省統計局 統計データ

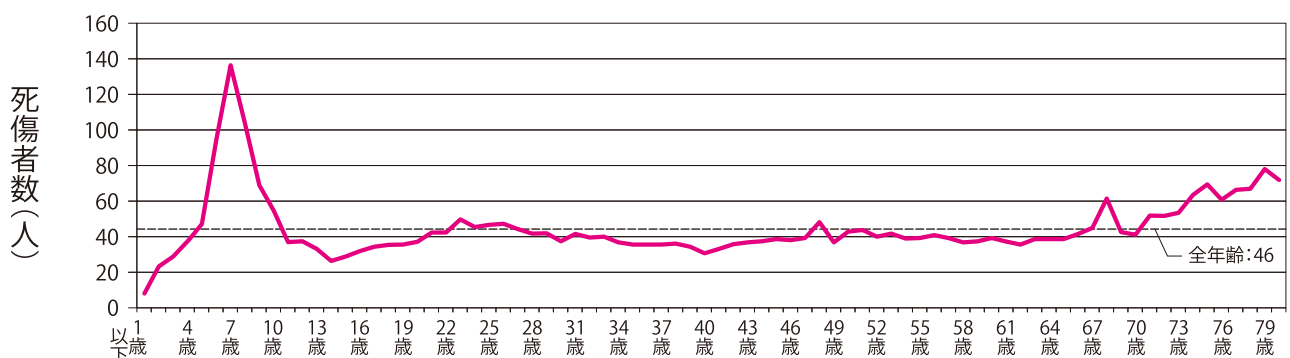


図4 人口10万人当たりの歩行中の交通事故 死傷者数 (平成27年)

③ 子供の歩行中の交通事故の特徴について

それでは、なぜ7歳児に死傷者のピークがあるのでしょうか。他の年齢層と比較しながら子供の歩行中の交通事故の特徴を見ていきたいと思います。

■93%の事故が日中と薄暮時に発生

はじめに歩行中の交通事故が発生した時間を明け方、日中、薄暮時、夜間に分けて見てみます。

図5に示した通り、13歳辺りまではほとんどが日中に発生し、13歳を過ぎた辺りから徐々に夜間の事故が増加していきます。そして16歳から60歳辺りまでは日中と夜間の事故がほぼ同数で推移し、60歳を超えた辺りからまた日中の事故による死傷者数が増加していきます。外で行動する時間帯が年齢によって異なることが大いに影響していると思われます。

図6は7歳児の歩行中の交通事故の発生時間帯を示したグラフです。7歳児の歩行中の交通事故の73%が日中に発生し、これに日没前後の薄暮時を合わせると93%にもなります。

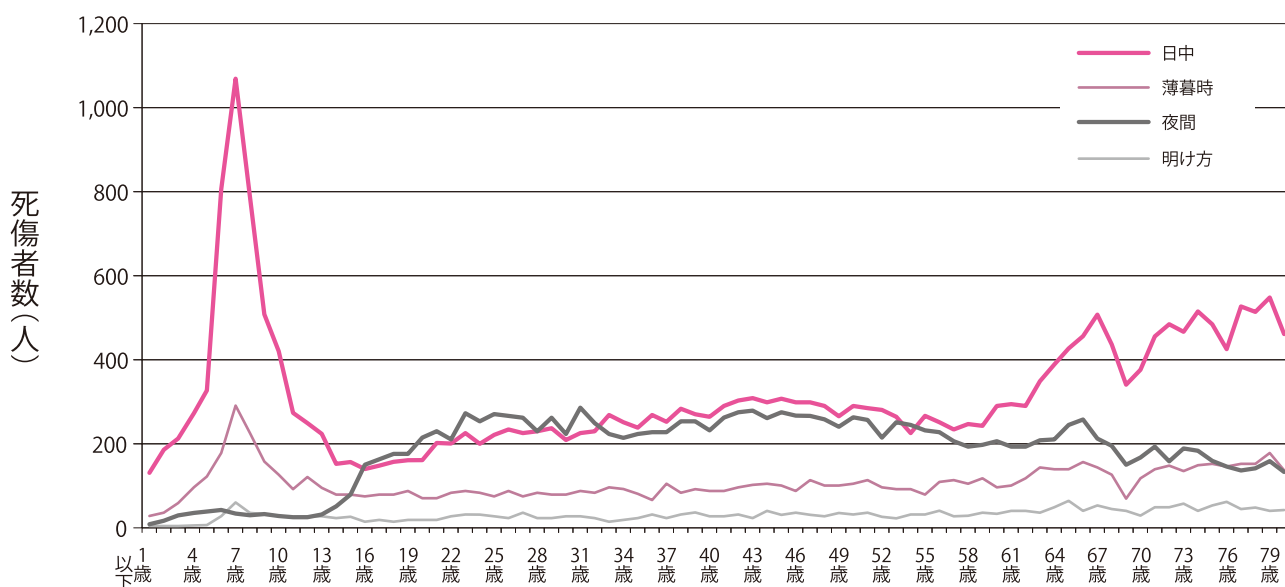


図5 昼夜別 歩行中の交通事故 死傷者数 (平成27年)

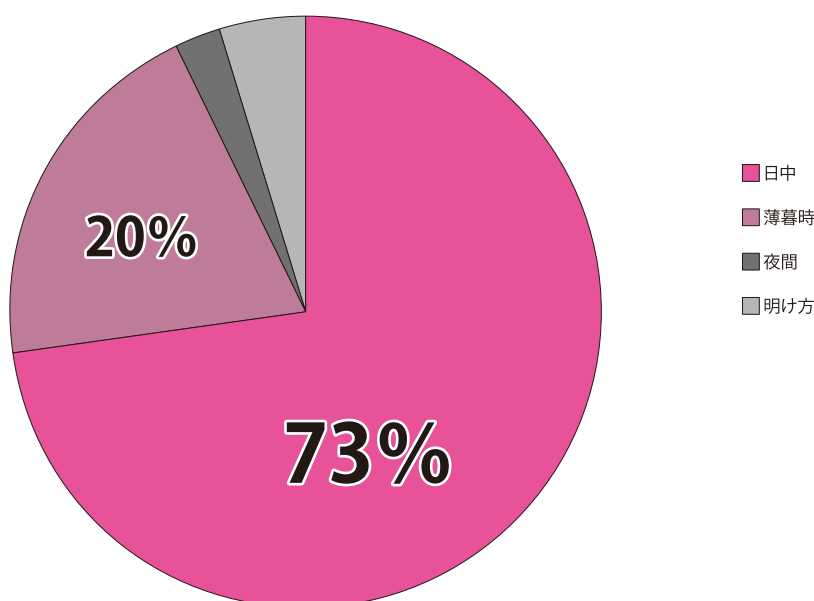


図6 昼夜別 7歳児の歩行中の交通事故 死傷者数 (平成27年)

■平日の死傷者数は日曜日の約2.5倍!

次に曜日別の死傷者数にはどのような傾向があるのでしょうか。

図7は曜日別の死傷者数を示したグラフです。どの年齢でも日曜日は他の曜日と比べて死傷者数が少なく、7歳児のピークもさほど目立ちません。日曜日ほどではありませんが土曜日と平日と比較してやや少ない傾向が確認できます。

図8に曜日別の7歳児の死傷者数をグラフにしました。平日の死傷者数は250人前後で推移していて、土曜日の約2倍、日曜日の約2.5倍となっています。

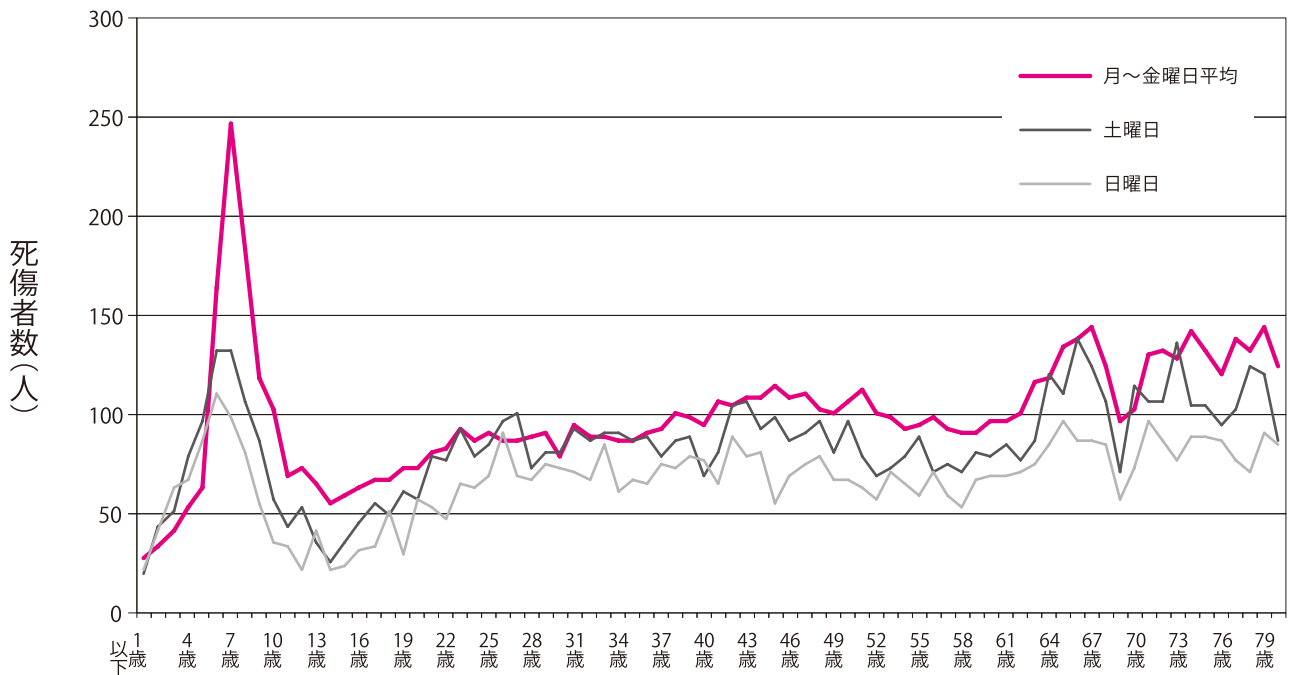


図7 曜日別 歩行中の交通事故 死傷者数 (平成27年)

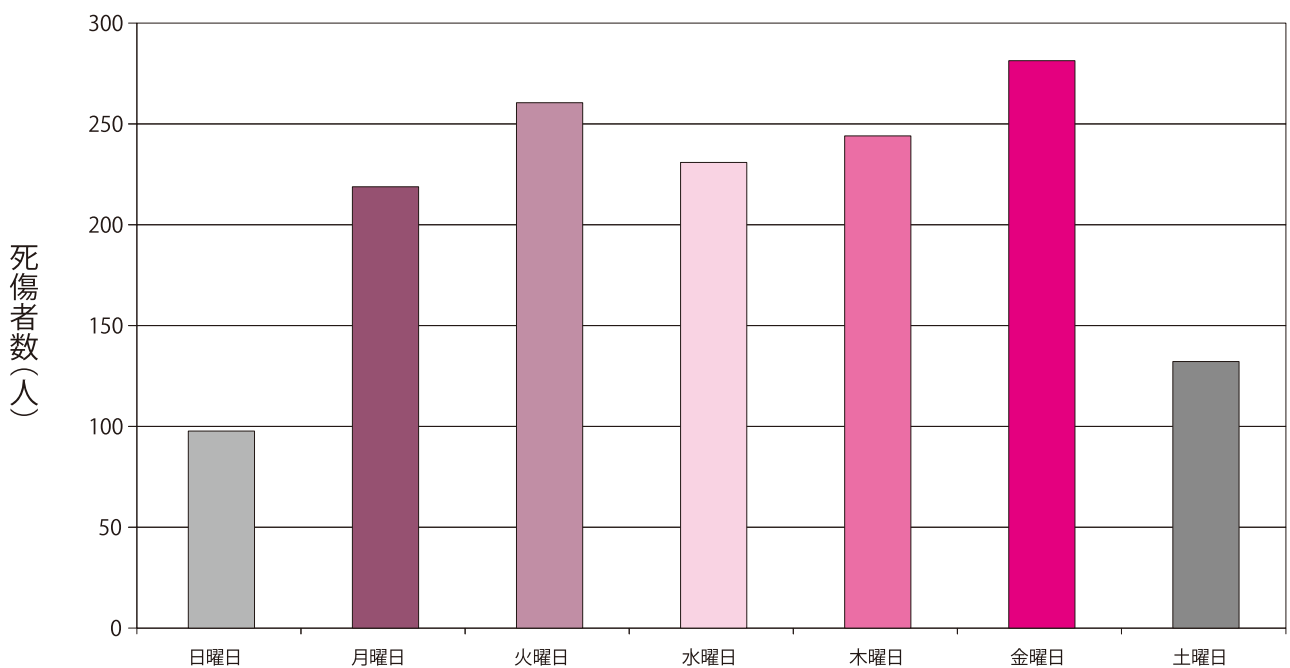


図8 曜日別 7歳児の歩行中の交通事故 死傷者数 (平成27年)

■登下校以外の通行目的でも7歳児の死傷者数が最多！

次に事故が発生した時の歩行者の通行目的を見ていきます。

図9は0歳から15歳までの死傷者数を通行目的別に分けてグラフにしたものです。6歳からは小学校が始まるために登下校中の事故が急増しています。また遊戯・訪問^{注1)}も登下校ほどではないものの6歳から急増し、5歳児の死傷者数の1.8倍にもなります。そして、どの通行目的についても死傷者数は7歳をピークに減少していきます。幼稚園や保育園に通っている間は大人が送り迎えをして、幼稚園、保育園が終わった後も大人と一緒に行動することが多いと思います。一方、小学生になると児童だけで登下校をし、小学校が終わった後は一人で遊びに出かける機会が増えていきます。先述した子供の歩行中の交通事故の多くが平日の日中に発生していることも、子供だけで行動しているときの事故が増加していると考えると納得ができます。

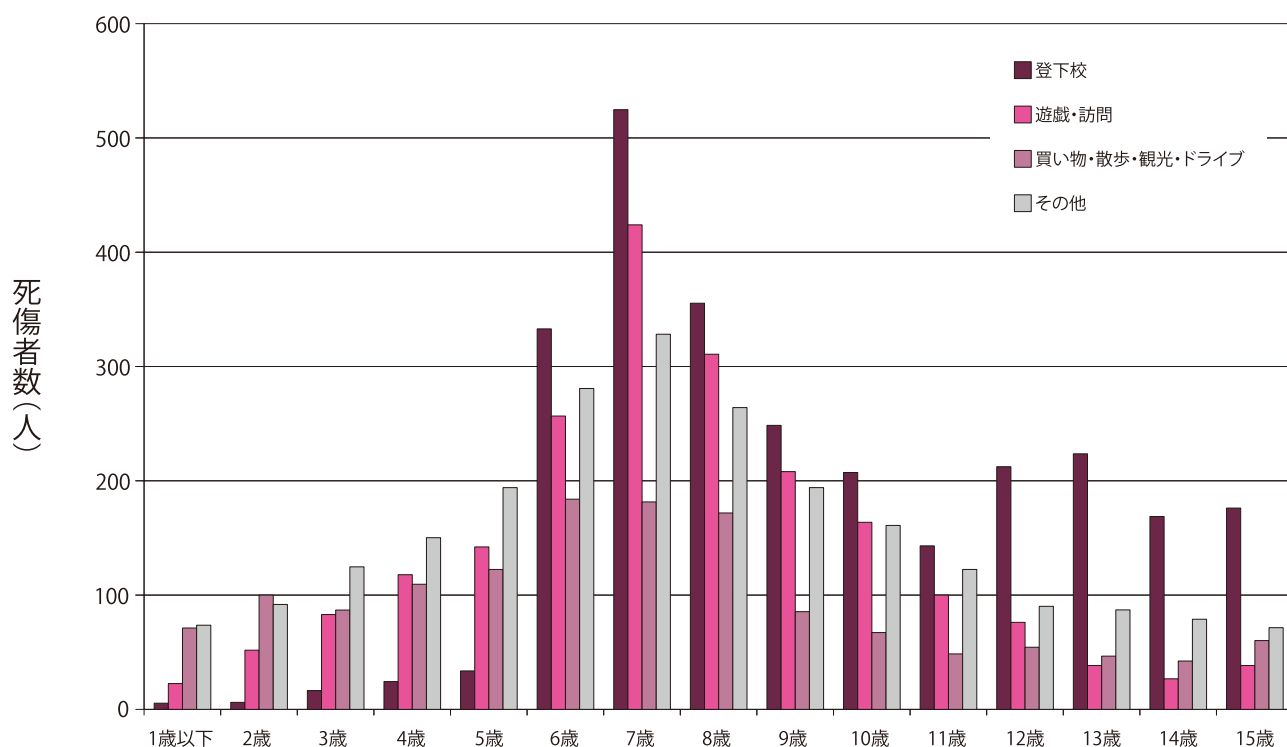


図9 通行目的別 歩行中の交通事故 死傷者数 (平成27年)

注1) 遊戯とは、歩行者が路上においてキャッチボールなどの遊戯中に事故が発生したことを指します。

また訪問とは、親類や友人宅などを訪れることを目的とした移動中に事故が発生したことを指します。

■男児の死傷者数は女児の約2倍！

最後に性別の違いによる特徴を見たいと思います。

図10は歩行中の交通事故による死傷者の女性に対する男性の比率を示したグラフです。参考に日本の総人口の男性比率^{注2)}も併せて載せています。歩行中の交通事故の死傷者数は7歳付近では男性比率が2倍を超えてほかの年齢の男性比率よりも高くなっています。そして7歳を過ぎた辺りから男性比率が下がり、17歳付近では1倍を割り込んで女性の死傷者の方が多くなります。その後は30歳辺りまで徐々に上昇して、しばらく1.5倍辺りで推移し、50歳付近から徐々に減少して60歳辺りからはまた1倍を割り込んで女性の死傷者の方が多くなります。

総人口の男性比率を考慮すると、65歳以上で女性の死傷者の方が多くなるのは総人口における女性比率が高いことが少し影響をしていると思われますが、60歳辺りまではほぼ1倍で推移していますので、60歳以下の死傷者の男性比率に対しては総人口の影響はほとんどないようです。

男児の死傷者数が女児の約2倍ということは、男児の方が外に出る機会が多いからなのでしょう。改めて通行目的別の死傷者数を男女別にして図11に示します。通行目的によらず男児が女児の2倍以上となっています。例えば登下校中の事故も男児が女児の2倍になっていますが、登下校の頻度や距離には男女の差はありませんので、男児の方が危ない行動を取る傾向があるのかもしれません。また遊戯・訪問では女児の約2.5倍とさらに比率が高くなっていますので、女児に比べて男児の方が外に出て遊ぶ機会が多いのかもしれません。

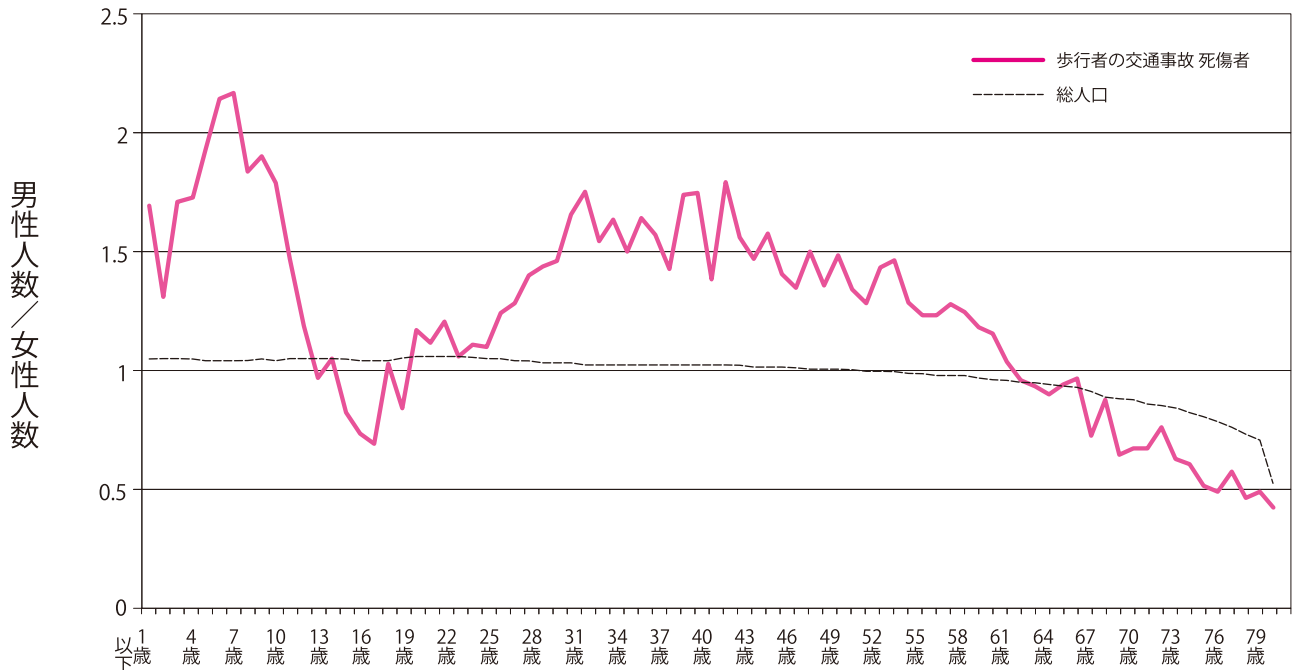


図10 歩行中の交通事故死傷者数 男性比率 (平成27年)

注2) 日本の総人口の男性比率は総務省統計局の平成26年10月1日現在人口から算出しています。

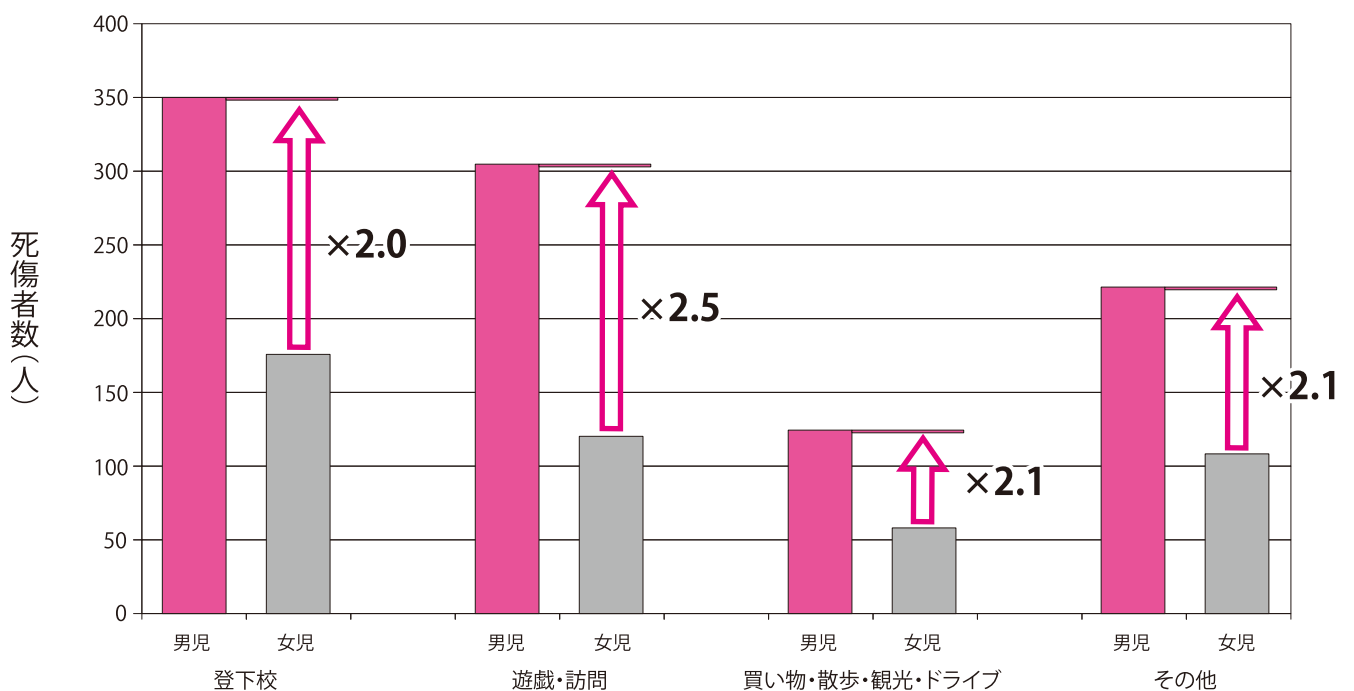


図11 男女別 通行目的別 7歳児の歩行中の交通事故死傷者数 (平成27年)

4 まとめ

これまで見てきた通り、歩行中の交通事故による死傷者数は7歳児に大きなピークがあり、他の年齢と比較して約2倍から2.5倍と際立って大きな数でした。

7歳児の歩行中の事故の特徴をまとめると

- 73%が日中に発生し、薄暮時と合わせると93%が日中もしくは薄暮時に発生している。
- 平日の死傷者数は、土曜日の約2倍、日曜日の約2.5倍の値となっている。
- 小学校が始まる6歳から登下校中の事故が増加するが、遊戯中や訪問中など登下校以外の通行目的でも7歳児が最も多い。
- 男児の死傷者数は女児の約2倍で、男児の方が危険な行動を取る傾向があると推定される。

これらの特徴を見ていると、7歳児にピークが生じるのは、「小学校が始まることで登下校中の事故が増加するから」という単純な理由ではないように思います。そしてここで注目したい点は、死傷者数が7歳にかけて急激に増加した後、そのまま推移するのではなく、すぐに減少しているという点です。地域で登下校中の児童を見守る活動やその他の交通安全教育、交通安全キャンペーンなどの活動については、7歳を過ぎた児童だけに大きな効果を発揮するとは考え難いため、7歳を過ぎた後の死傷者数の減少には別の理由がありそうです。

7歳に掛けて死傷者数が増加したということは、その裏には事故に至らなかった数多くの危険な状況があったと思います。そして7歳を過ぎても登下校の頻度や外で遊ぶ機会は変わらないにもかかわらず死傷者数が減少したということは、子供自身が危険な状況に遭遇し、その経験を通してどのような行動が危険なのかを学んだことで、死傷者数が減少しているということなのかもしれません。

もしこの仮説が正しいとすると、小学校に入学するまでに一人で安全に行動できるように、これまで以上にしっかりと準備をしておく必要があるのではないのでしょうか。例えば、翌年に小学校入学を控えている子供に対しては、入学予定の小学校の通学路や子供の行動範囲内にある公園やコンビニエンスストアまでの道のりを、一人でも安全に行動できているかどうかを意識しながら一緒に歩いてみると良いと思います。この頃の子供は頭で理解できていてもそれを行動に繋げることは難しいため、繰り返し指導する必要があると思います。“小学校に入学してから”ではなく、“小学校に入学するまでに”、できるだけ時間をかけて交通安全指導を積み重ねておくことで、歩行中の交通事故による死傷者数の“7歳児のピーク”を小さくすることができるのではないのでしょうか。

(山口 朗)

イタルダイインフォメーションに関するお問い合わせ先 渉外事業課 TEL 03-5577-3973 FAX 03-5577-3980

公益財団法人 交通事故総合分析センター

- ウェブサイト <http://www.itarda.or.jp/> ●Eメール koho@itarda.or.jp
- フェイスブック <https://www.facebook.com/itarda.or>

本部

〒101-0064 東京都千代田区猿樂町2-7-8 住友水道橋ビル8階
TEL 03-5577-3977(代表) FAX 03-5577-3980

つくば 交通事故調査事務所

〒305-0831 茨城県つくば市西大橋641-1 (一財)日本自動車研究所内
TEL 029-855-9021 FAX 029-855-9131